松尾教授著 〝地球の春〟の感銘

渡辺　祥吉（昭二）

先日大阪の十日会の席上、松尾教授の近著「地球の春」を頒けていただいてきた。帰りの車中で読みかけたところ、読む程に面白く息もつかせぬ思いであった。そしてその晩、近頃の私には珍しく、この二百五十頁の本を一気に読み通してしまった。そして何とその後味のよかったこと、爽やかなこと、近来こんないい本は読んだことがないように思われた。なぜこの本が私をそんなに惹きつけたか、私はもう一度思い直してみた。

まず第一は、何といっても名文であるということである。始めから終りまで軟かい、そして香り高い文章で満たされていた。フランス文学をやる人というものは、自分で書く文章も、こうまで美しくなるものか、と感嘆せずにはいられなかった。

第二は、深い郷土愛といったものが著書全巻を通して流れているということである。もちろん著者は静岡県の生れで、北海道の人ではない。しかし一九二九年から四十年間私共の母校の教授としてその地に住んでいられた。そしてその年月を通して、北海道はもう動かし難い著者の郷土となった。その地を本当の郷土とした程、これを知りつくし、そしてこよなく愛したのである。そうでなければこの著書は生まれなかった筈である。恐らく母校に三年間を学んだ卒業生は、この著書を読んだならば、例外なく深い望郷の念にかられることと信ずる。一つ二つの例をあげてみる。

巻頭「地球の春」のトップに

「山は荒れほうだいに荒れる。白と灰色模様の巨獣が地響をたてて唸り、吼え、山腹にぶつかり、谷間を突走り、狂気の限りをつくす。……そのくせ嵐が止んだ翌日は、青空一点張りの舞台で、雪の反射がガラスのように目に痛い……」

「雪虫」の中では、

「北海道の夏は、夏が来る前に夏を思い、夏のさなかに夏を思い、夏の後で夏を思う。夏ではなく、夏の思いばかりである」これらの表現は本当に北海道を郷土とした人のみがいいきれる所であろう。

「燃える金魚」という題で、雪野原の一本道を歩いてくる金魚屋さんの姿が書かれている。私も少年の頃「きーんぎょうおー、きんぎょう」とふれてくると、もう春を運んでくる風物だとして心はずませたことを思い出す。あの、耳の底に残っている声が、この文章でまざまざとよみがえってくる思いであった。「北海道の春は、どっとあげ潮のようにやってくる」そうだほんとうにそうだと私も思うのである。

第三は、この著書は深いヒューマニズムで貫かれているということである。それは文章の美ではなく、著者の人柄そのものがにじみ出ているということであろう。

例えば「太陽と死は」の中で、癌で亡くなった角谷君という人を書いているが、そこでは、次のように書いていられる。

「駿河台の病院で別れるとき〝すぐこの近くにおいしいそば屋さんがある。先生をあそこへ案内してあげなさい〟と、彼は奥さんにいった。これが私の耳にいまでも残っている彼の最後の音声だった。崩れた顎に対してまだしっかり抵抗している男性的な鼻梁を見て、私は、彼がこのまま死ぬようなことはあるまいと思った。彼は生と死に対する礼儀を心得ていた。生に対しては〝この期におよんでも、テレビを見ていると、けっこうおもしろい〟と書き、死に対しては〝もう少しこづかい銭がほしかった〟と、過去形で現わしていた。なんという男だろう、私はただ茫然とするばかりだった。あの高台の朝の、満開の桜の花が目に浮んでしかたがない」

と。強く読者の心をゆさぶらずにはおかないだろう。

「私の博物誌」の中には色々な動物、カッコー、キツツキ、チョウ、セミ、フナ、カスベ、タコ、コオロギ、メジロ等々、小動物が出てくるが、何れも愛の目をもって見つめていられる。最後の「イヴオンヌ」ではヒロイン役のイヴオンヌに対する「私」の思いやりの深さには、只々頭の下がる思いであった。

「閉じる目」は正にその題名のごとく、澄んだ力強い目をもって文明を批評していられる。それは開き直らずに、軽いユーモアをもって、しかもきびしい批判をしている。例えば「女のことば」「正しいまちがい」「フランスの学生」「人称代名詞」「民主教育時代」「英語に強くなる本」等々面白く読ませて、しかも心うたれるものばかりである。

終りに諸所に挿入された著者のすさびと思われる植物の絵八枚が、この書を一層たのしいものにしてくれている。

とも角も私は、近来にない名著として読ませていただいたことを著者に感謝せずにはいられない。この気持を緑丘の誌友の皆さんにお伝えして御一読をすすめる。

（春秋社発行、定価九〇〇円）

前学長加茂先生 資料 榎本武揚

「東京オリンピックは世界と日本とのお見合いであったが、万博は世界と日本との結婚である」―という言葉がある。明治維新以来百年、敗戦後二十五年を経過したわが国に於て、今や全世界の驚異と注目を浴びて千里丘陵万博が華々しく開幕された。

昭和三十五年学長就任早々にして名著「榎本武揚」を世に送り出された加茂前学長の続篇ともいうべき「資料・榎本武揚」をこの時期に当って紹介することは尠なからぬ意義なしとしない。

B6判・四一八頁のクロース張り表紙を開くと、ペテルブルグ在任、オランダ遊学中の武揚、海律全書、流星刀、武揚夫妻の正装その他数葉の写真掲載がある。

目次によって内容を紹介しよう。

日記篇
　渡蘭日記
　　（自文久二年十一月二日　至文久三年三月二十五日）
　北海道巡廻日記
　　（自明治六年九月十六日　至明治六年十二月一日）
　シベリア日記
　　（自明治十一年七月二十三日　至明治十一年十月二日）
書翰編
付録　流星刀記事
榎本武揚小伝
関係資料
榎本武揚年譜

以上の内「武揚小伝」は維新史上、幕臣の出でありながら武将榎本にとどまらず、いち早く海外の思想、技術を身につけた彼が新政府に於てすぐれたイクスパートとして登場の経緯を深く示すものとして一読の要があろう。開国百年の日本国土に開花した万国博を思い合せる時、斯る先人の功を思うこと一入である。

（新人物往来社発行・二三〇〇円）

△原稿募集▽

四十五年度第一号は

伴房次郎先生追憶集

書簡集を四十四年度最終号として発刊し続いて追憶集を発刊しますので伴先生を偲ぶ原稿を募集します。

〆切　五月二十日

花村哲夫先生逝く

小樽高商、商大時代（昭和一一・九―三二、八）教授、助教授を勤めて東京外大へ転出された同校のスペイン語科主任教授、同図書館長である花村哲夫先生は十二月二十六日午後八時三十分、心筋コウソクのため東京世田谷区東玉川二―三六の実弟淳介氏宅（島津製作所常務取締役）で死去、六十二歳。

告別式は二十八日午後一時から東京都文京区本駒込三―一九吉祥寺で行なわれた。

喪主妻綾子さん。

自宅は、東京都文京区本駒込三ノ二七〇。

●医薬の発展につくす

現代病に挑戦し
今日と明日の健康を
つくる日本新薬

健康こそ何よりもまさる幸せと考える私どもは脳卒中、心臓病交通傷害など社会の進歩とともにふえる病気にとりくみ、すぐれた治療薬を開発、みなさまの健康でゆたかな暮しづくりにご奉仕しています。

〝健康メーカー〟《日本新薬》のこれからにご期待ください。

現代病に挑戦する
日本新薬KK
創立50周年

NI-79

日本新薬株式会社　本社／(601)京都市南区西大路通八条

緑丘

1970 No. 71
44年度　第5号

EXPO '70
文山雅弘

小樽商大
同窓会誌

サッポロビールは
最初のうまさが持続する

サッポロビールが90年の歴史のうちに育て上げた名酵母M_2。それが純粋なうまさをつくります。いやなニガ味やくどさがありません。だから何杯飲んでもうまさが持続。一度ぜひ ほかのビールと飲み比べて下さい。

味は本場の――――――ミュンヘン・サッポロ・ミルウォーキー